新精選 国語総合　組見本

現代文入門
1 現代文入門
水の東西
山崎正和
「風おとし」が動いているのを見ると、その中に何とぐ人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水を受けて、それが満ちると重みで下がり、空になるとまた上がってくる。静かに繰り返されるこの動きが、なぜか人の心を誘うのである。
見ていると、単純な動きやかけ合いが、無限につまらない繰り返しであり、それが一気にほどけ、しかし同じような緊張がまた一から始められる。ただ一滴の水が竹の筒を満たし、その重みがはずみをつけて一気に水を吐き出すまでの、ほんの数十秒の間に、人はいやおうなしに引き込まれ、立ち会わされてしまう。
水の流れなのか、時の流れなのか、「風おとし」はわれわれに流れるものを感じさせ、それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れそのものの存在を強調しているとさえいえる。
私はこの「風おとし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本のわび文化がいろいろと紹介される中で、あの素朴な竹の響きが案外人の心を引きつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行ではたぶん、一つの音と次の音との長い間隔を聞いてはいられず、一つの音と次の音との長い間隔を聞いてはいられず、一つの音と次の音との長い間隔を聞いてはいられず